

問題一 次の文章を読み、後の問に答えよ。

自分の部屋は二階で、隣の無い、割に静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。わきが玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目はねめになっている。その羽目の中にはちの巣があるらしい。^②

(a)ひとまず玄関の屋根に下りた。

(b)すぐ細長い羽を両方へしつかりと張ってぶーんと飛び立つ。

(c)そこで羽や触角を前足や後ろ足で丁寧に調える^③と、

(d)虎斑とらふかの大きな太ったはちが天気さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しそうに働いていた。

(e)少し歩き回るやつもあるが、

(f)はちは羽目のあわいからすり抜けて出ると、

(g)飛び立つと急に早くなって飛んで行く。

植え込みのやつでの花がちょうど咲きかけではちはそれに群がっていた。自分はダイクツすると、よく欄干らんかんからはちの出入りを眺めていた。

ある朝のこと、自分は一匹のはちが玄関の屋根で死んでいるのを見付けた。足を腹の下にぴったりと付け、触角はだらしく顔へタレ下がっていた。ほかのはちは一向に冷淡だった。巣の出入りに忙しくそのわきをはい回るが全く拘泥する様子はなかった。忙しくたれ働いているはちは「生きてる物という感じを与えた。そのわきに一匹、朝も昼も夕も、見る度に一つ所に全く動かさずうつむきにコロがついているのを見ると、それがまた」「死んだものという感じを与えるのだ。それは三日ほどそのままになっていた。それは見えていて、「静かな感じを与えた。寂しかった。ほかのはちがみんな巢へ入ってしまった日暮れ、冷たいかわらの上に一つ残った死骸を見ることは寂しかった。しかし、それは」「静かだった。夜の間にはびい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根もきれいに洗われていた。はちの死骸はもうそこになかった。今も、巣のはちどもは元気に働いているが、死んだはちは雨どいを伝つて地面へ流し出されたことであろう。足は縮めたまま、触角は顔へこびりついたまま、たぶん泥にまみれてどこかでじっとしていることだろう。外界にそれを動かす次の変化が起るまでは、死骸はじっとそこにしているだろう。それともあまりに引かれていくか。それにしろ、それはいかにも静かであった。せわしくせわしく働いてばかりいたはちが、全く動くことがなくなったのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた。

(志賀直哉「城の崎にて」)

問一 傍線部①②⑤⑭⑮⑯の品詞名を答えよ。

問二 (a)～(g)は原文の叙述の順序をばらばらに崩してある。これらを元の正しい順序に並べかえよ。

【一番初めに来るのは、(d)である。】

問三 傍線部③の読みを記せ。

問四 傍線部④⑥⑧のカタカナを漢字に改めよ。

問五 傍線部⑦の意味を答えよ。

問六 問題文中から、擬人法が用いられている十五字以内の文(センテンス)を書き抜け。

問七 文中の「」には同じ語が入る。次の中から適語を選び、符号で答えよ。

ア なんとなく イ たまたま ウ いかにも エ とにかく

オ はたして カ やはり キ よほど

問八 文中から、擬態語と擬音語をそれぞれ一つずつ抜き出せ。

問九 傍線部⑨⑫⑬の「それ」の指し示す内容を、できるだけ文中の言葉を使つて的確に記せ。

問十 傍線部⑩の説明として適当なものを次の中から選び、符号で答えよ。

ア 死の形をはつきりと見せつけられた時の、恐怖を帯びた寂しさ。

イ 死骸が炎天下にさらされ続けていることに対して感じる寂しさ。

ウ 完全に死の世界に入ってしまったはちへの安らぎに似た寂しさ。

エ はちの死に、生あるもの全てに関わる宿命を感じた時の寂しさ。

問十一 傍線部⑩はどういう気持ちを表しているか。次の中から適当なものを選び、符号で答えよ。

- ア 生と死とが互に関係することなしに存在する、おごそかで冷酷な現実を静かに肯定する気持ち。
イ 一匹のはちの死によって周りが静まり返つたのを見ながら、無常と静けさを感じている気持ち。
ウ 死んだはちが顧みられず、静かにうち捨てられるのは、あまりにもかわいそうだという気持ち。
エ ほかのはちは生きていて、このはちだけが死の静けさの中にあるのは、理不尽だという気持ち。 問十二
この作者が属していたとされる「派」を次から選び、符号で答えよ。

- ア 無頼派 イ 高踏派 ウ 奇蹟派 エ 耽美派 オ 白樺派

問題二 次は栗林農夫の「高浜虚子」と題する評論文の一部である。読んで後の問に答えよ。

かつて虚子の弟子であった① A ②が「高浜虚子並に周囲の作者達」という本を書いたことがある。虚子を中心とする③ B ④「内部の俳人たちの動きにカラませて、虚子を批判し、ついに「 i 」をヒルガエして⑤ B ⑥」を去るまでの経過を書いたものであるが、そこには「 ii 」関係に結ばれる結社というものの実態と、それに君臨する虚子の「 iii 」「ぶりが、手やわらかい」 iv 」ではあるが、かなりはつきり描かれている。虚子にとっては、あまり快い本ではないはずである。ところが虚子は、そのすぐの新年の新聞紙上に「老の春高浜虚子という書物」という俳句を発表した。「 v 」が大きいともいえるし、⑦ C ⑧態度ともいえる。虚子はそういう人である。かつて「⑨ D ⑩論」が出たとき虚子は「おかげで俳句も⑪ D ⑫にまで出世することができた」といったそうであるが、ここにも虚子の人生態度とその「 vi 」が出てくる。「⑬ D ⑭論」に限らず、従来虚子に対してはいろいろの批判がなされてきたが、虚子にかかつてはいつも⑮ E ⑯であった。このような理論的不死身から、虚子は老獪とも、「 vii 」的な偉大な存在とも見える。

ともあれ、明治、大正、昭和の三代にわたって、常に俳句界の中心に位置し、「⑰ B ⑱王国」に君臨して俳壇の支配的勢力をしめ、老来なお句作に衰えを見せない虚子は、確かに俳句史上に特筆さるべき大きな存在である。数万と称せられるその作品の中には平俗な、月並とさえ見られるものも多いが、俳句の方法を融通自在に駆使して多彩にあやなす手腕はさすがに「 viii 」で後世に残るべきすぐれた作品も少なくない。それは単に虚子の寛厚な人間的「 v 」とか、「⑳ B ㉑」の経営の巧みさなどだけにあるはずがない。そこには虚子の人生態度と、そこから導き出される俳句理論が、伝統にツチカわられている日本の精神的風土にかなうところがあるからに違いない。それがどういふ文学的意義を持つかは、今日の課題である国民の文学としての俳句を考えるうえに重要である。

問一 傍線部①②③④⑤⑥のカタカナを漢字に改めよ。

問二 空欄⑦⑧⑨⑩に適する語を各組の中から選び、符号で答えよ。

- | | | | | | |
|---|----------|------------------------------|---------|---------|--------|
| A | ア 北原白秋 | イ 五木寛之 | ウ 永井荷風 | エ 水原秋桜子 | オ 野間宏 |
| B | ア アララギ | イ ホトトギス | ウ 馬酔木 | エ スバル | オ 明星 |
| C | ア 謙虚すぎる | イ 横柄な | ウ 人を食った | エ 遠慮深い | オ 真面目な |
| D | ア 第二芸術 | イ 第三芸術 | ウ 第四芸術 | エ 第五芸術 | オ 第六芸術 |
| E | ア ぬかるみに水 | イ 弾け樽 <small>はじける</small> に水 | ウ 乾き田に水 | エ 焼け石に水 | |
| | オ 蛙の面に水 | | | | |

問三 空欄「i」～「viii」に適する語を次から選び、符号で答えよ。(同じ符号を二度以上使わないこと) A

- 包容力 B 独裁 C 非凡 D 師弟 E 俳句観 F 反旗

G 筆致 H 超絶

問四 文中に次の文を入れるとすれば、どこがふさわしいか。この文の直後にくる文の初めの四字を書き抜くことで答えよ。

このような虚子の「偉大」さはどこからきたのであろうか。

問五 傍線部③④⑤の代名詞は何を指すか。文中の語を抜き出すことで答えよ。

問題三 次はヴェルレーヌの詩「落葉」(上田敏訳)である。読んで、後の問に答えよ。

秋の日の

ヴィオロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
ここかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな。

問一 第二連の「ヴィオロンの」の「は」は連体修飾格である。では、「ためいきの」の「の」は何格か。
次の中から適したものを選び、符号で答えよ。なお、「ヴィオロン」というのは「ヴァイオリン」のことである。

A 主格 B 連体修飾格 C 連用修飾格 D 目的格 E 破格
F 同格 G 所有格

問二 第一連の六行目の「うら」はどういう意味を持つ語か。次から選び、符号で答えよ。

A 末 B 裏 C 心 D 浦 E うちら
F 字良 G ただ

問三 第二連の三行目の「色」は、何の色か。次から選び、符号で答えよ。

A 服 B 目 C 恋人 D 顔 E 鐘の音
F 趣 G 暦

問四 第二連六行目の助詞「や」は、この場合どういう意味で使われているか。次から選び、符号で答えよ。

A 疑問 B 勧誘 C 呼びかけ D 反語 E 切れ字
F 詠嘆 G 複数

問五 第三連六行目の「落葉かな」の主語は何か。文中の語で答えよ。

問題四 次の短文中の傍線を施した言葉は適語ではない。【例】にならって、適切な語(漢字二字の熟語)に改めよ。ただし、その場合、【例】の傍点で示したように、傍線部の漢字のどちらかは必ず使うこととする。

【例】復讐措置をとる。(答||報復)

〈i〉 あやしい風貌の男が街角に立っている。

〈ii〉 ここは本当に展望絶佳の地だ。

〈iii〉 夜を日に継いで、遭難者を探索する。

〈iv〉 その雑誌は私どもで出している定期発刊物です。

〈v〉 質問せめにして、授業を逸脱させることに成功した。

〈vi〉 まさしく政治の貧窮を物語る出来事だ。

〈vii〉 なんだかんだと不服を並べる。